

一緒に考えるということ

校長 高田 晶子

立春が過ぎ、春の気配を心待ちにする季節となりました。

そのような中、3年生は入試本番を迎え健康管理や日々の生活を引き締め、追い込みをかけているようです。

1, 2年生は限られた生活様式という条件の中でも学年の行事や三送会に向けて前向きに取り組み、その姿勢から成長が感じられます。緊急事態宣言の延長ということ、身近なこととして捉えるのも難しいところではありますが、自分の行動が、自分や他の人の命を守ることになるということ、教育の場からしっかり伝えていきたいと思えます。



<1年：職業学習>

さて、アフガニスタンでの活動を通して「国際貢献」を続けてきた、医師の故中村哲氏をご存じの方も多いたと思います。2019年に武装勢力に銃撃され逝去されました。ペシヤワール会の現地代表として、用水路建設に力を注ぎ、住民が本当に望むものに沿って、住民と一体となって活動をしていました。

中村氏は、活動をする中で、それぞれの国の文化の中で、その文化が間違っているか、間違っていないかではなく、実際問題として住民がよりよくなる状態、あるいは少しでも幸せになるような状態をつくっていくことが大事であると伝えていきます。現地の住民と一体となれば解決されないというのです。いくら先進国の知識をもって行動を起こそうとしても、文化が違うわけですからそれがそのまま現地の生活に合致することは難しいわけです。

私たちは、とかく物事の問題が発生したときに、自分の考えを基準に解決方法を考えます。一方そうした場面で、「相手の気持ちになって考えよう」とか「思いやりの気持ちをもって」という言葉をよく耳にしませんか。学校教育の中でもよく使われます。ですが、その言葉から一步踏み込むことが大切なのだと思います。まず、「相手を知る」「相手の状況をつかむ」ということが解決のポイントになるのではないのでしょうか。

また、どんなに戦乱や干ばつという過酷な状況においても、アフガニスタンの人々は暗い顔をして生活をしているわけではないともいいます。意外なほどみんな明るく過ごしていて、逆に手伝いに来る日本人の方が深刻で暗い顔をしていることがあるのだそうです。アフガニスタンの活動を通して、「国際貢献」というのは、単に人を助けるということではなく、共に考えたり、一体となって行動したりして、そこから学ぶべきものが多い行いなのだ中村氏は私たちに伝えてくれています。

コロナ禍での生活も、相手の気持ちになって考えたり、理解したりして、少しでも幸せになるためにはどうすることがいいのか、などと一緒に考える良い機会なのかもしれません。暗い顔をしている場合ではありませんね。